

# 2023 年度第 2 回明石市文化財保護審議会次第

日時：2024 年（令和 6 年）3 月 15 日（金）午後 2 時～

場所：文化博物館 2 階大会議室

## 1. 開会

## 2. 議題

### （1）市指定文化財の指定について（答申案の検討）

- ・赤根川金ヶ崎窯跡出土角杯形土器等須恵器一括（42 点）
- ・稲爪神社太鼓

### （2）市指定文化財候補旧大久保本陣母屋（西光寺庫裏）の調査結果（報告）

### （3）文化財標柱の設置について（報告）

### （4）大久保町松陰新田における古墳跡の発見について（報告）

### （5）その他

## 3. 閉会

(1) 赤根川金ヶ崎窯跡出土角杯形土器等須恵器一括 (42 点)

時代 古墳時代後期 (6 世紀前半)

評価 赤根川金ヶ崎窯跡は、市内最古の窯跡であり、そこでは須恵器を焼成していた。窯跡、灰原、溝から出土した須恵器類は、全国的に地方窯が拡散していく時期の様相を示すもので、とりわけ角杯形土器は、当寺須恵器を集中的に焼いていた大阪南部の古窯跡群からは見つかっておらず、全国でも 20 数例しか知られていない特殊な土器である。窯跡からの出土としては、福井県興道寺窯跡とこの明石の出土例の 2 例しかない。朝鮮半島の新羅地域で多く見ついている土器で、他の装飾付甕などとともに、近畿地方周辺部における文化の伝播のあり方を知る上でも貴重な資料群である。

杯 11 点、高杯 3 点、角杯形土器 3 点、器台 2 点、甕 1 点、壺 13 点、甕 3 点、  
堤瓶 3 点、装飾須恵器 1 点、把手 1 点、陶板 1 点 計 42 点

|    | 器種  | 器形              | 幅        | 器高   | 出土地    | 報告書掲載番号 |
|----|-----|-----------------|----------|------|--------|---------|
| 1  | 須恵器 | 杯蓋              | 13.2     | 4.5  | 第一次窯体内 | 図11-5   |
| 2  | 須恵器 | 杯身              | 14.5     | 4.9  | 第一次窯体内 | 図11-11  |
| 3  | 須恵器 | 杯蓋              | 15.5     | 5.1  | 第二次窯体内 | 図12-1   |
| 4  | 須恵器 | 杯身              | 15.8     | 5.6  | 第二次窯体内 | 図12-1   |
| 5  | 須恵器 | 杯蓋              | 13.8     | 5.0  | 第二次窯体内 | 図12-1   |
| 6  | 須恵器 | 杯身              | 14.8     | 6.0  | 第二次窯体内 | 図12-4   |
| 7  | 須恵器 | 杯蓋              | 15.8     | 5.9  | 第二次窯体内 | 図12-4   |
| 8  | 須恵器 | 杯身              | 15.8     | 5.5  | 第二次窯体内 | 図12-6   |
| 9  | 須恵器 | 杯蓋              | 14.6     | 4.6  | 第三次窯体内 | 図12-6   |
| 10 | 須恵器 | 杯身              | 18.0     | 5.2  | 第三次窯体内 | 図13-7   |
| 11 | 須恵器 | 蓋(つまみ付)         | 8.6      | 5.8  | 灰層     | 図13-18  |
| 12 | 須恵器 | 高杯              | 12.2     | 11.6 | 灰層     | 図15-13  |
| 13 | 須恵器 | 高杯              | 11.7     | 9.0  | 灰層     | 図15-19  |
| 14 | 須恵器 | 有蓋高杯            | 11.4     | 6.7  | 灰層     | 写真      |
| 15 | 須恵器 | 角杯形土器           | 6.5      | 9.5  | 灰層     | 図24-10  |
| 16 | 須恵器 | 角杯形土器           | 4.0      | 7.5  | 灰層     | 図16-34  |
| 17 | 須恵器 | 角杯形土器           | 8.5      | 23.9 | 溝内     | 図25-38  |
| 18 | 須恵器 | 筒型器台            | 13.5     | 20.8 | 灰層     | 図26     |
| 19 | 須恵器 | 器台              | 38.2     | 48.9 | 灰層     | 図27     |
| 20 | 須恵器 | 甕               | 43.9     | 44.0 | 灰層     | 写真      |
| 21 | 須恵器 | 壺               | 11.0     | 12.6 | 灰層     | 写真      |
| 22 | 須恵器 | 壺               | 11.0     | 12.3 | 灰層     | 図15-22  |
| 23 | 須恵器 | 壺               | 9.2      | 8.1  | 溝内     | 図24-21  |
| 24 | 須恵器 | 壺               | 19.1     | 19   | 灰層     | 図25-31  |
| 25 | 須恵器 | 小壺              | 8.2      | 6.5  | 灰層     | 写真      |
| 26 | 須恵器 | 小壺              | 9.7      | 7.2  | 溝内     | 図16-25  |
| 27 | 須恵器 | 装飾須恵器小壺         | 9.7      | 7.2  | 灰層     | 図25-30  |
| 28 | 須恵器 | 小壺(ミニチュア)       | 7.2      | 4.2  | 灰層     | 図25-26  |
| 29 | 須恵器 | 小壺(ミニチュア)       | 6.4      | 3.5  | 灰層     | 図25-27  |
| 30 | 須恵器 | 小壺(ミニチュア)       | 3.8      | 2.5  | 溝内     | 図25-28  |
| 31 | 須恵器 | 小壺(ミニチュア)       | 6.1      | 3.8  | 溝内     | 写真      |
| 32 | 須恵器 | 短頸壺             | 12.2     | 6.2  | 灰層     | 図15-23  |
| 33 | 須恵器 | 短頸壺             | 13.3     | 7.3  | 灰層     | 写真      |
| 34 | 須恵器 | 臚               | 12.8     | 14.9 | 第二次窯体内 | 図12-15  |
| 35 | 須恵器 | 臚               | 12.2     | 11.9 | 溝内     | 図24-15  |
| 36 | 須恵器 | 装飾付臚(オオサンショウウオ) | 9.6      | 7.4  | 灰層     | 図17     |
| 37 | 須恵器 | 装飾付須恵器シカ        | 4.5      | 3.6  | 灰層     | 図30-3   |
| 38 | 須恵器 | 提瓶              | 15.5     | 19.0 | 灰層     | 図16-31  |
| 39 | 須恵器 | 提瓶              | 18.3     | 21.4 | 灰層     | 写真      |
| 40 | 須恵器 | 提瓶(ミニチュア)       | (9.6)8.6 | 8.4  | 灰層     | 図25-34  |
| 41 | 須恵器 | 把手              | 4.3      | 7.5  | 灰層     | 図16     |
| 42 | 須恵器 | 陶板              | 25.7     | 19.0 | 灰層     | 図18     |



赤根川金ヶ崎窯跡出土品一括

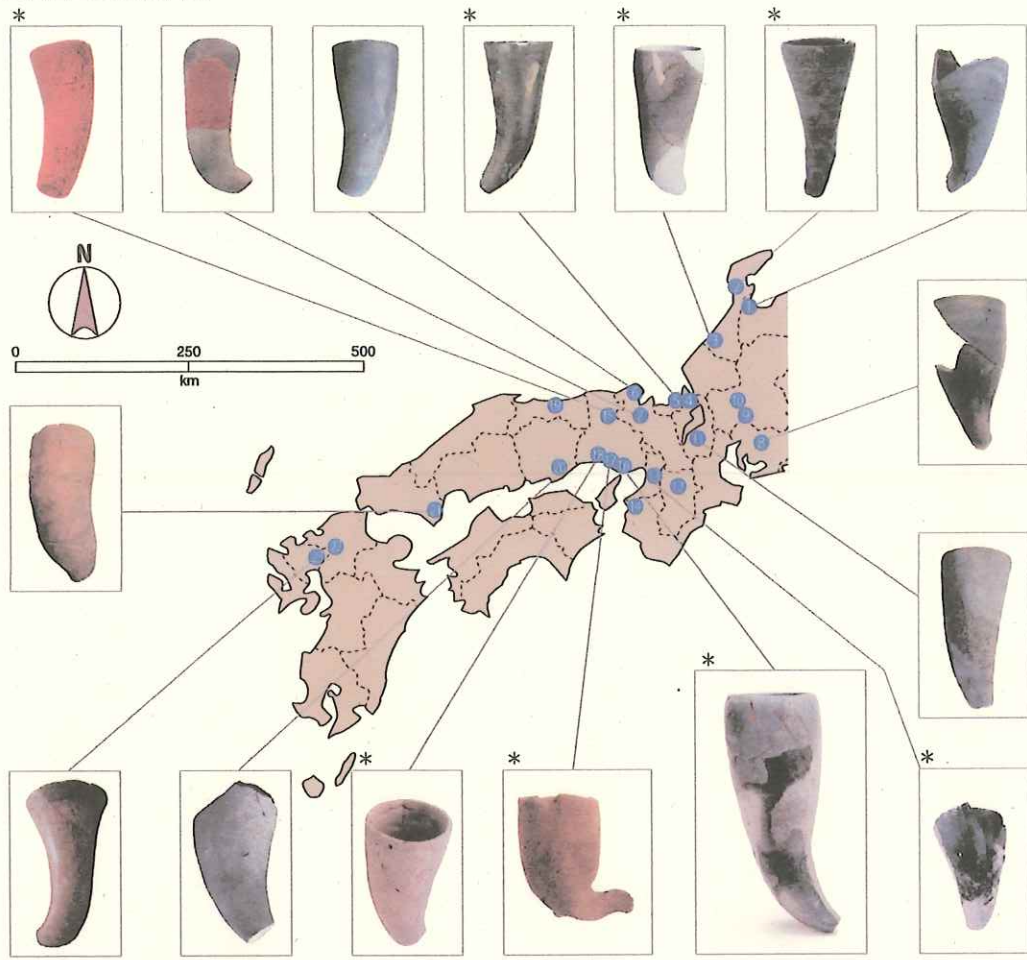


角杯形土器



装飾付壺

角环出土位置図と地名表



\*は所蔵機関より写真の提供を受けました。他は岡元撮影。

角环出土位置図・地名表の作成：岡元 順子

| 番号 | 遺跡名        | 所在地               | 法量 (cm)                       | 素材         | 時期            | 出土遺構など     | 所蔵             |
|----|------------|-------------------|-------------------------------|------------|---------------|------------|----------------|
| 1  | 上久津呂中屋遺跡   | 富山県水見市上久津呂        | h = 15 ~ 18 φ = 8             | 須恵器        | 6 ~ 7 世紀      | 落ち込みと流路    | 富山県埋蔵文化財センター   |
| 2  | 上棚中村畑遺跡    | 石川県羽咋郡志賀町大字上棚     | h = 20 φ = 9.8 × 8.7          | 須恵器        | 6 世紀後半        | 大溝 上層部     | 石川県埋蔵文化財センター   |
| 3  | 敷地天神山遺跡    | 石川県加賀市大聖寺敷地町      | h = 17 (残存長) φ = 9.2          | 須恵器 (加賀産)  | 6 世紀前半        | 竪穴住居覆土中    | 石川県埋蔵文化財センター   |
| 4  | 興道寺窯跡      | 福井県美浜郡美浜町興道寺      | h = 21 φ = 11.6 他             | 須恵器        | 6 世紀前半        | 灰原         | 東京国立博物館        |
| 5  | 獅子塚古墳      | 福井県美浜郡美浜町郷市       | h = 16 φ = 7<br>h = 22 φ = 10 | 須恵器        | 6 世紀前半        | 横穴式石室      | 東京国立博物館        |
| 6  | 大耳尾 2 号墳   | 京都府京丹後市峰山町赤坂小学大耳尾 | h = 20 φ = 13                 | 須恵器        | 6 世紀初頭 ~ 前半   | 第 1 主体部棺外  | 京丹後市古代の里資料館    |
| 7  | 長砂南遺跡      | 京都府綾部市豊里町長砂       | h = 16 φ = 7.2                | 土師器        | 5 世紀後半か       | 竪穴住居       | 綾部市資料館         |
| 8  | 梅坪遺跡       | 愛知県豊田市東梅坪町        | h = 18 φ = 9                  | 須恵器 (猿投産)  | 6 世紀末 ~ 7 世紀末 | 溝状の不定形土坑   | 豊田市郷土資料館       |
| 9  | 蘇原地内       | 岐阜県各務原市蘇原野口       | h = 9.6 φ = 8                 | 須恵器        | 6 世紀後半        | 未詳 (古墳と推定) | 個人             |
| 10 | 隔徳寺裏山 1 号墳 | 岐阜県関市千疋裏山         | h = 18.2 φ = 8.7              | 須恵器        | 6 世紀前半        | 石室内        | 岐阜県博物館         |
| 11 | 小槻大社 10 号墳 | 滋賀県栗東市栗東町下戸山      | h = 18 φ = 8.8                | 須恵器        | 6 世紀前半        | 周溝底自然堆積土   | 栗東市出土文化財センター   |
| 12 | 南山 4 号墳    | 奈良県橿原市南山町         | 角环を載せた動物型高環                   | 陶質土器       | 5 世紀前半 ~ 中葉   | 墳頂部        | 橿原市千塚資料館       |
| 13 | 西岩田遺跡      | 大阪府東大阪市西岩田        | h = 22 φ = 9                  | 須恵器        | 6 世紀前半        | 溝? 土坑?     | 東大阪市立郷土博物館     |
| 14 | 井辺八幡山古墳    | 和歌山県和歌山市井辺        | 角环を背負った人物埴輪                   | 埴輪         | 6 世紀前半        | 造り出し部      | 同志社大学歴史資料館     |
| 15 | 柿坪遺跡       | 兵庫県朝来市山東町大月       | h = 17.4 φ = 6.9              | 土師器 (柿色)   | 5 世紀前半        | 竪穴住居床面     | 兵庫県立考古博物館      |
| 16 | 赤根川金ヶ崎窯跡   | 兵庫県明石市魚住町         | h = 23.9 φ = 8.8 他 2          | 須恵器        | 6 世紀前半        | 灰原・溝       | 明石市教育委員会       |
| 17 | 美乃利遺跡      | 兵庫県加古川市加古川町大野     | h = 11.6 φ = 7.2              | 土師器        | 古墳時代中期        | 溝          | 兵庫県立考古博物館      |
| 18 | 亀田遺跡       | 兵庫県揖保郡太子町上太田      | h = 13.4 φ = 8.6              | 須恵器        | 6 世紀後半 ~      | 流路・包含層     | 兵庫県立考古博物館      |
| 19 | 青谷上寺地遺跡    | 鳥取県鳥取市青谷町         | h = 17 φ = 9 × 4              | 木器 (ヤマグリ)  | 弥生中期          | 溝          | 鳥取県埋蔵文化財センター   |
| 20 | 斎宮遺跡       | 岡山県赤磐市山陽町         | h = 7 (残存長)                   | 須恵器        | 6 世紀前半        | 竪穴住居       | 岡山県古代古墳文化財センター |
| 21 | 明地遺跡       | 山口県熊毛郡田布施町        | h = 16 φ = 7.3                | 土師器        | 5 世紀中葉 ~ 後半   | 竪穴住居       | 山口県埋蔵文化財センター   |
| 22 | 隈・西小田 1 号墳 | 福岡県筑紫野市光ヶ丘        | h = 19.2? φ = 7.8?            | 須恵器        | 6 世紀前半        | 古墳墳丘内      | 筑紫野市教育委員会      |
| 23 | 切畑 A 遺跡    | 佐賀県神埼市神埼町         | h = 14 φ = 9                  | 土師器 (黒色磨研) | 6 世紀後半        | 溝          | 佐賀県立名護屋城博物館    |

## (2) 稲爪神社太鼓

時代 江戸時代中期 (1788 年)

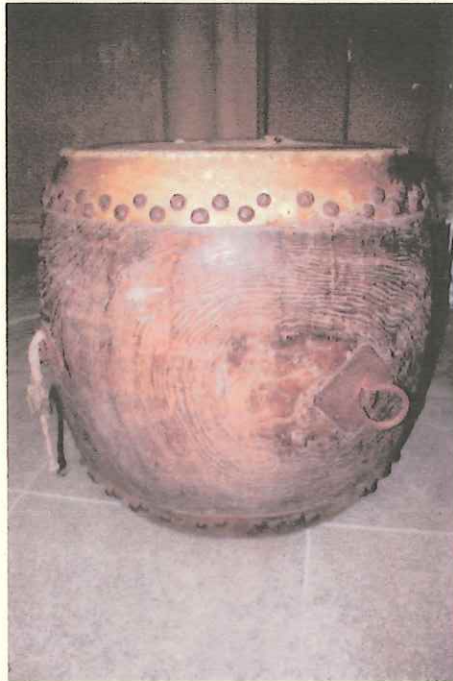
状態 胴長 75cm、胴径 80cm、鏡面径 68cm

胴体は檜製、胴体に 4 つの環が付く。胴体内に歴代の太鼓皮張替時の墨書銘があり、最も古いものに天明 8 年 (1788) の年紀がある。

評価 江戸時代中期に発祥したとされる布団太鼓に伴う鳴太鼓であることが、環の配置によって明らかであり、また胴体内に記された墨書から天明 8 年 (1788) に作られたことが推察できる。その後、15 年～20 年毎に太鼓皮の張替えを行っていた履歴も詳細に残されている。当該布団太鼓は城主から拝領したといういわれも残されており、城下で行われていた江戸時代の祭りの様相と太鼓の制作・皮張替えに関わる職人の活動の一端を示すものとして文化財的価値が高い。



稲爪神社太鼓

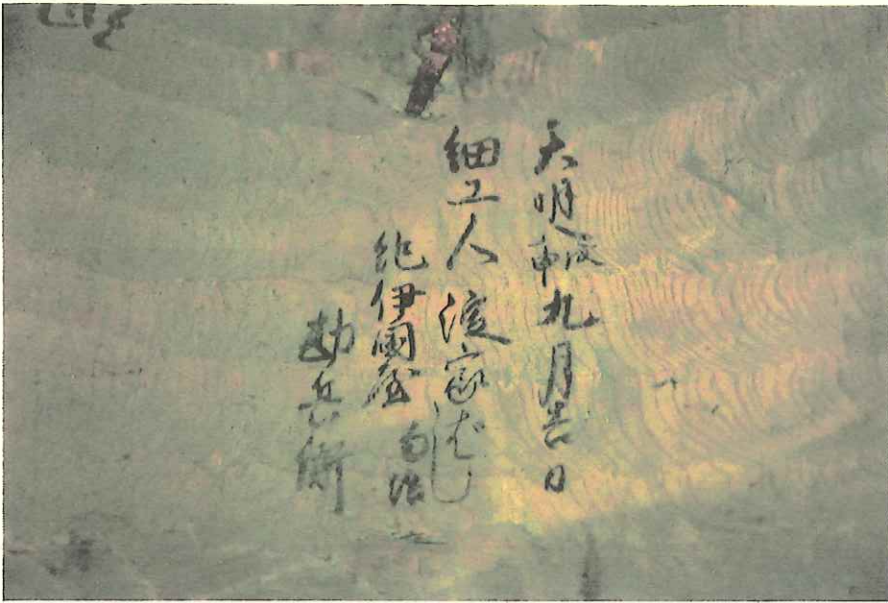


稲爪神社太鼓



稲爪神社秋例大祭  
往年の東之太鼓勇姿(昭和二九年当時)

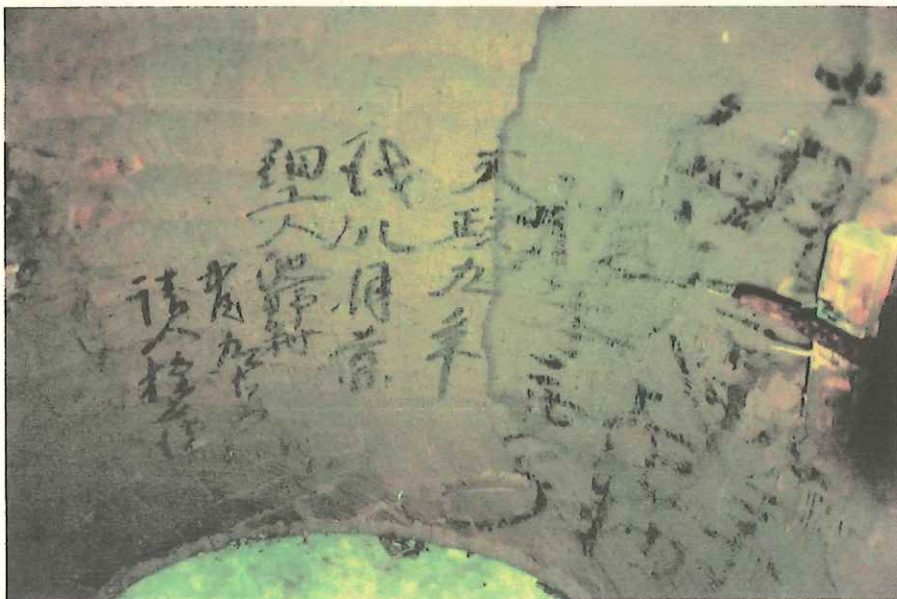
太鼓が載せられていた布団太鼓



太鼓内墨書



太鼓内墨書



太鼓内墨書



## 明石市内に残る江戸時代の布団太鼓の太鼓

### 稲爪神社 太鼓

大きさ 胴長 75cm、胴径 80cm、鏡面径 68cm

#### 胴内墨書銘

- 天明八 (1788) 戌申 九月吉日 細工人 淀屋ばし南詰 紀伊国屋 勘兵衛  
文化十年 (1813) 酉 八月吉日 はりかへ人 長九郎 池野村 請人 橋左衛門  
文政九年 (1826) 戌 八月吉日 細工人 池野村 九郎右衛門 請人 橋 左衛門  
安政三年 (1856) 辰 八月吉日 細工人 池野村 橋本屋 喜市郎  
明治九年 (1876) 子 九月吉日 細工人 池ノ村 橋本喜平  
明治十九年 (1886) 八月九日 太鼓 細工人 上池村  
明治〇年 (〇) 十月〇日 細工人 上池村 橋本喜兵衛  
大正拾四年 (1925) 九月廿八日 張替人 橋〇

### 八木村太鼓

大きさ 胴長 73cm、胴径 70cm、鏡面径 60cm

#### 胴内墨書銘

- 明和九年 (1772) 辰 摂州大坂 中之町  
寛政八年 (1796) 丑 七月吉日 太鼓張替人 池野村 傳兵衛  
天保十一年 (1840) 子 八月吉〇 細工人 池ノ村 〇

### 和坂村太鼓

大きさ 胴長 77cm、胴径 85cm、鏡面径 65cm

#### 胴内墨書銘

- 安永二年 (1773) 己 九月吉日 池野邑 細工人 太鼓屋傳兵衛  
寛政三年 (1791) 九月廿日 細工人 池野村 太鼓屋徳兵衛  
文化二年 (1805) 九月 細工人 池野村 たいこや伝兵衛  
辰 九月吉日 細工人池野村 橋本屋喜重郎 吉兵衛  
弘化三年 (1846) 喜一郎  
明治八年 (1875) 九月吉日 太鼓屋 細工人 吉谷〇〇 橋本九〇〇  
昭和二十二年 (1951) 太鼓屋 加古川町ビンゴ 石澤〇治  
昭和三十七年 (1962) 拾月 石澤光三  
昭和四十三年 (1968) 九月 石沢光三張之

参考

明石城太鼓

大きさ 胴長 77cm、胴径 85cm、鏡面径 65cm

胴内墨書銘

寛永拾 (1633) 五日 作人 九郎

寛永拾六年 (1639) 卯五月廿八日 上池村

慶安元 (1648) 十二月丁 作人□□

万治元年 (1658) □月十六日 作人 上池村

寛文九 (1669) 閏十月 日 上池村 作人□□

宝永二 (1705) 三月十六日 太□ はりて 池野 庄や 庄左衛門

正徳六 (1716) 歳 閏二月十一日 はりて 池野村庄屋 庄左衛門

享保八年 (1723) 卯月五日 張手 池野村 庄左衛門

享保拾八季 (1733) 戌五月 はりて 池野村庄屋 庄左衛門

享保廿年 (1735) 卯六月吉日 摂州大坂渡辺村北町 □兵衛

天保六年 (1835) 乙未三月吉日 細工人 池野村 清左衛門 伝兵衛

嘉永六年 (1853) 丑 六月吉日 張かへ 細工人 摂州渡邊村八軒町浜

文久四年 (1864) □月吉日 張替細工人 大坂渡辺村中之町

明治二十五年 (1892) 四月吉日張替 上池村 橋本梅松

市指定文化財候補旧大久保本陣母屋（西光寺庫裏）の調査結果

所在 明石市大久保町西脇

調査結果

明治45年(1912)に旧大久保本陣の母屋を当時250円で買って移築したと伝わる西光寺の庫裏について、令和5年(2023)12月25日に神戸芸術工科大学の山之内誠教授に現地調査を行ってもらった。

その結果、残された旧本陣の間取り図からすると、現在の庫裏の規模は母屋の半分以下であり、そのまま移築したものではないことが明らかとなった。また、庫裏の座敷における柱も面取りが大きなものは旧本陣の柱とみなされるものがあるが、配置位置も異なっており、旧材を利用したに過ぎないことがわかった。また、座敷と次の間の境に設けられた欄間の意匠は、格調高い格子欄間であり、旧大久保本陣から移設されたものであると考えられるが、床の間については、違い棚とともに明治45年の新造である可能性が高いと判断された。以上のことから、西光寺庫裏は、旧本陣の柱材を加え、旧柱材の位置も適宜変更して新たに作られたものであり、旧大久保本陣母屋の形態を残すものではないため、文化財指定するには及ばないと判断される。

調査所見 別紙 「西光寺庫裏の特徴及び文化的価値について」 参照

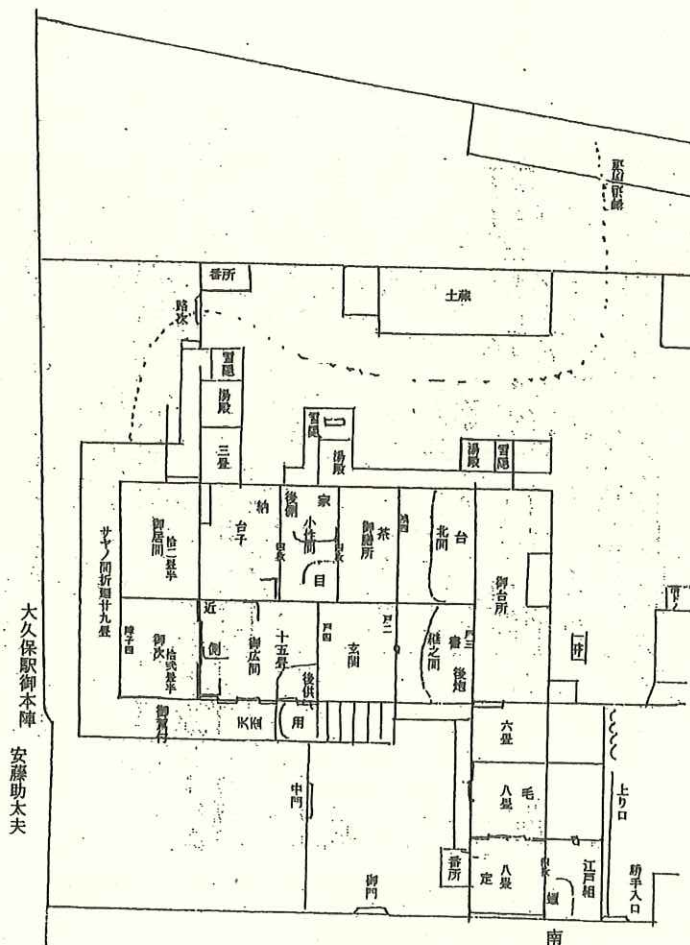
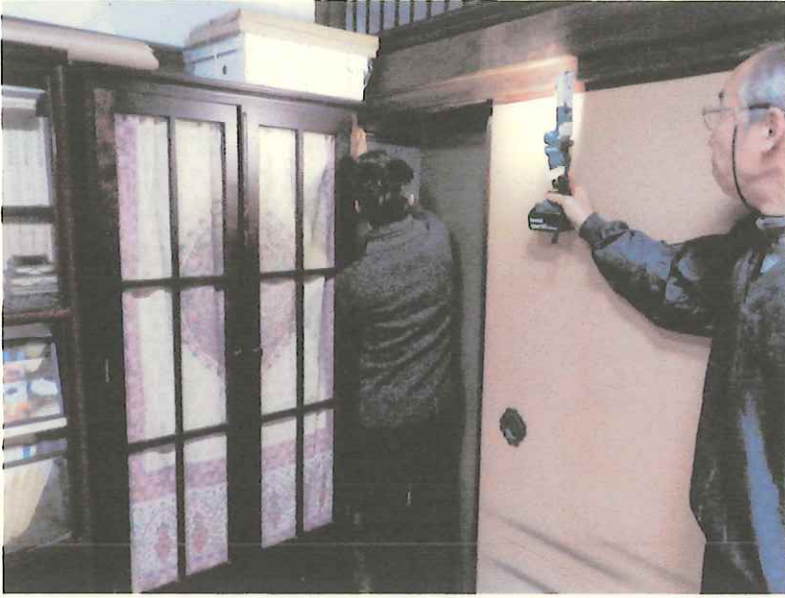


図21 大久保  
「大久保御本陣御間取図」(松江希蔵)



山之内先生調査風景



座敷



欄間

## 西光寺庫裏の特徴及び文化的価値について

神戸芸術工科大学 山之内 誠

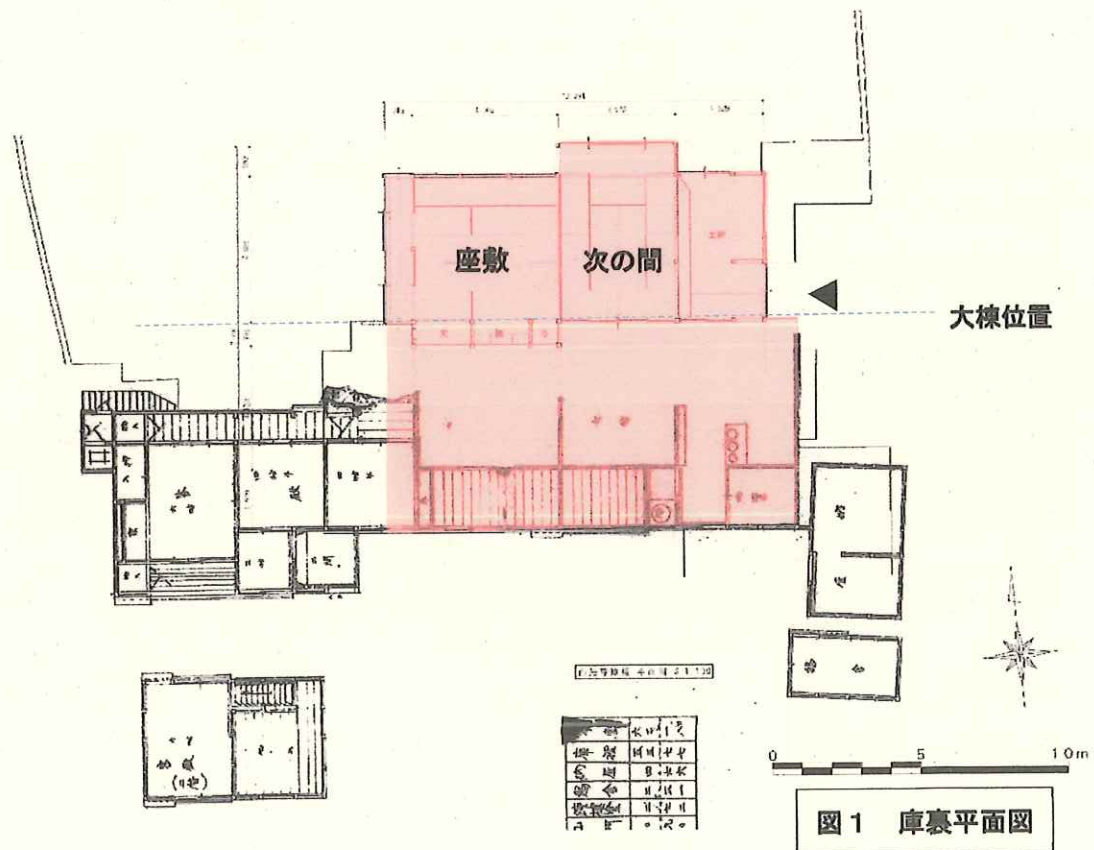
◎西光寺庫裏（所在地：兵庫県明石市大久保町西脇）

- ・構造形式：入母屋造妻入、棧瓦葺
- ・規模：梁行約 12.8m×桁行約 13.8m
- ・建立（移築）年代：明治 45 年（1912）頃（寺内の伝承による）

### 1. 概要

西光寺は、浄土真宗興正寺派に属するが、寺伝には開基は奈良時代の恵弁上人とあり、かつて北の丘陵に報恩寺という七堂伽藍の寺があり、その塔頭の一つであったという。天正 7 年の羽柴秀吉の三木攻めの際灰燼に帰し、文禄元年に了法上人が現在の地に再建した。

本堂の東南に隣接する現在の庫裏は、明治 45 年に旧大久保本陣の母屋を移築したものと伝えられており、現庫裏の北側西奥の座敷の柱には旧本陣時代の上段の痕跡が残されているうえ、12 畳半という本陣の上段としては大きな座敷を継承している点も旧大久保本陣の特徴を示すと考えられるが<sup>注1</sup>、一方で座敷部分の 4 本の柱以外、他の多くの柱は移築時に補加されたと考えられ、また旧材の柱配置も変更されていることが明らかのため、明治末



の移築に際し、旧材を用いて新築に近い工事が行われたのが現在の姿であると考えられる。

## 2. 建物の平面構成【図1】

庫裏は妻入平面で東面し、大棟の位置を境に北半分は（東から）土間（7 畳半）・次の間（10 畳）・座敷（12 畳半）の3室が連なり、座敷の西側と次の間の北側に半間幅の下屋をさしかけて、それぞれ廊下及び物置とする。一方、南半分は住居部分であり、北半分と対称に同規模の3室が連続するが、東側に半間、南側に一間幅の下屋をさしかけて拡張し、廊下と物置を設けている。また西端部分の底は隣接する客殿と接合する。なお、南半分の西側の室には、北に隣接する座敷の床の間・違棚・仏壇が半間分張り出している。

## 3. 庫裏の来歴について

現在の庫裏は、明治45年に当時の価格で250円にて購入・移築したものであることが寺に伝えられており<sup>注2</sup>、明治3年に本陣、脇本陣が廃止された後、移築までの間に村役場としても使われていた建物である。近世に松江藩において参勤交代に使用した本陣の間取りを記録した資料「駅々御本陣間取図」には、「大久保本陣 安藤助太夫」と記した屋敷の間取図が残されているが【図2,図3】、この屋敷の上段にあたる「御居間」には「拾二畳半」と広さが明記されており、現在の庫裏の座敷と規模が一致する。宿場の本陣については、東海道や中山道などの網羅的な研究から、上段は8畳-10畳を通例とすることが指摘されているが<sup>注3</sup>、それらに比して大久保本陣は大規模なものであったことが窺える。現在の庫裏の座敷も同じ12畳半であるため、移築に際してこの規模を踏襲した可能性が指摘できる。ただし、明治45年の移築に際して使用され

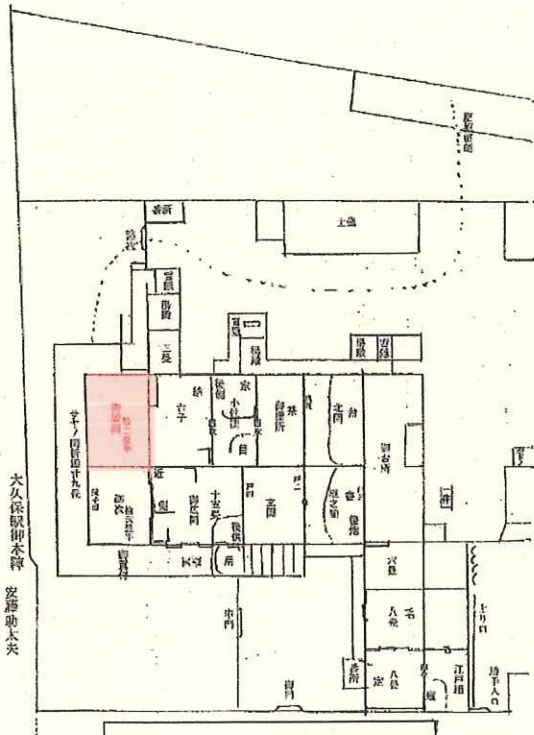


図2 大久保本陣間取図

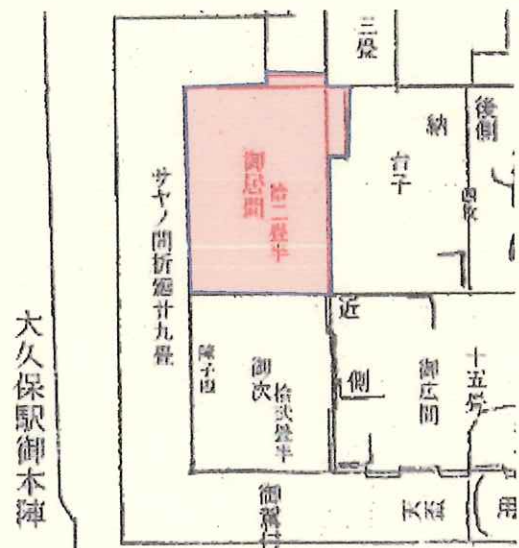


図3 大久保本陣間取図（部分）

た旧本陣の建材は一部のみであったようで、そのうえ現在の庫裏の規模は旧本陣の母屋の半分以下にすぎないため、旧建物をそのまま移築したわけではないことが明らかである。実際には、後述のように移築というよりも、むしろ旧材を一部用いて新築したというのが実情に近いようである。

現在地への移築後は、大きな改変は受けておらず、特に北半分は当初の姿を良くとどめているが、わずかながらも以下の改変が行われたことが判明している<sup>注4</sup>。

- ・昭和30年代に〔ほ⑥〕—〔へ⑥〕間にあった壁を撤去して座敷側に仏壇を設置
- ・昭和40年代に〔は⑤〕—〔は⑥〕間の壁を撤去
- ・昭和40年代に〔ろ⑤〕—〔は⑤〕間の格子戸（引戸）を撤去
- ・平成20年代に次の間の床を張替え

#### 4. 座敷まわりにみられる痕跡と意匠について

ここでは便宜的に以下の【図4】のように番付を設定して柱位置を示しながら、主として庫裏の北半分の座敷を中心とする室について、現状を目視により判断した暫定の所見を記す。（なお、部材の新旧等については、正確には解体修理時に精緻な調査を行わないと確定できない点が多いため、多分に推定を含むことを了解されたい。）

##### ○小屋構造について

現在の庫裏は、桁行方向に次の間と座敷が並ぶ形態だが、大久保本陣間取図【図2】をみるかぎり、元は梁間方向に「御次」と「御居間」が並ぶ構成であったと思われる。建物規模も移築後は半分以下に減じているので、小屋構造も根本的に変更されたと考えられる。屋根裏

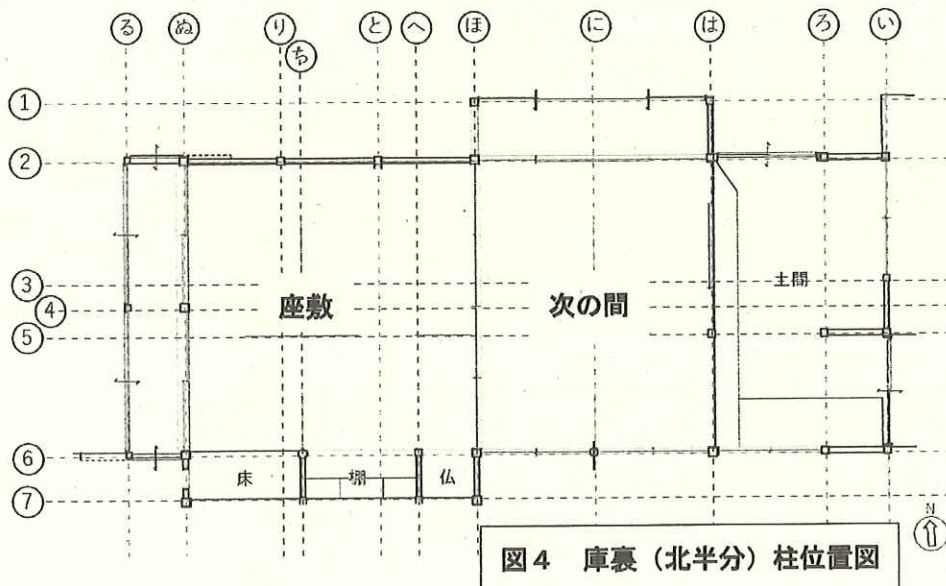


図4 庫裏（北半分）柱位置図

には和小屋の小屋組が設けられているが、小屋束および小屋貫は移築時に新材により一連の仕事として組まれたように見受けられる。その下の梁行・桁行の小屋梁についても概して整然と組まれているが、一部に使用されていない仕口や太柄穴をもつものなどがみられ、旧本陣の小屋材を転用していることが窺われる。よって、おそらくは、移築時に旧材を用いて新たに再構成したものと考えられる。

○座敷における柱の痕跡について【写真1】【写真2】

明確に旧建物の痕跡をとどめる材としては、座敷の3本の柱（[ぬ⑥] [ぬ②] [ほ②]）があげられる。これらの3本は面取が比較的大きく、見付6mm（2分）とする点が共通している。また、[ほ⑥]も共通の面取が施されていることから、改造痕跡は見受けられないものの、旧本陣の柱と考えられる。以下には、これら4本の痕跡について概要を記す。

- ・ [ぬ⑥] 及び [ぬ②] は、足元に框の仕口痕を示す埋木があり、また室内側と室外側（東側・西側）の両方において現状の長押上に、長押を取り付けていた仕口が認められることから、かつて上段だった「御居間」の床高を次の間に合わせて一段（4寸2分程度）下げ、これにあわせて長押も一段下げたものと推定できる。
- ・ [ぬ②] の柱位置には、旧本陣の間取図【図3】では付書院が取り付けられていたように読み取れるが、現在この面には何かを取り付けられた痕跡は認められなかったため、上段の鞘の間に面した別の位置の柱を、移築時に [ぬ②] の位置に充てたと推定できる。
- ・ [ほ②] については、[ぬ⑥] [ぬ②] と同様に、次の間側の長押の上にかつての長押の仕口が残るほか、南面に床框と落とし掛けを取り付けて

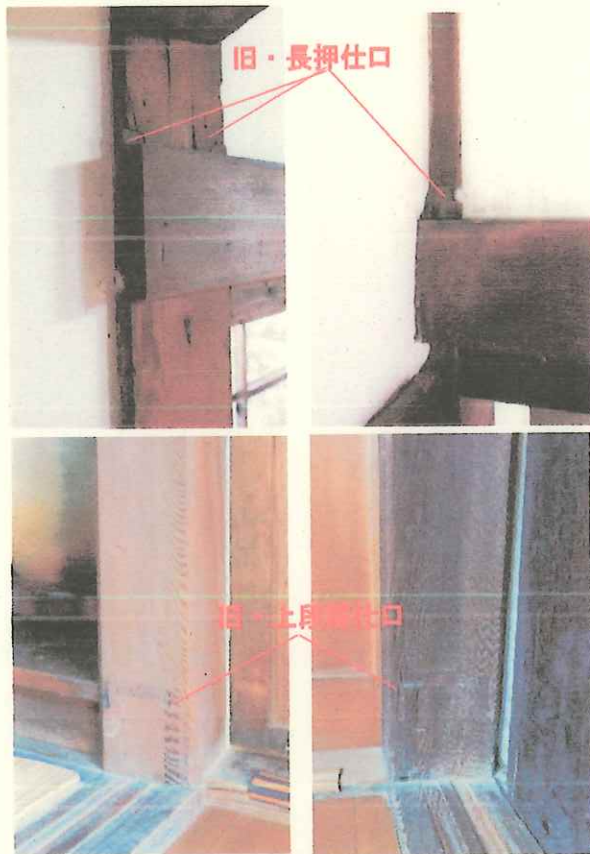


写真1 旧本陣の柱の痕跡1

左上：「ぬ⑥」上部東面/ 右上：「ぬ②」上部西面  
 左下：「ぬ⑥」下部北面/ 右下：「ぬ②」下部南面

いた仕口が残るため、床脇の柱であったことが判明した。[ほ②]は現在、座敷と次の間との境にあるが、旧本陣の間取図【図3】の床の間は次の間と離れているうえ、次の間側から見て右側、すなわち現在とは逆の面に設けられているため<sup>注5</sup>、移築以前は[ち②]





写真2 旧本陣の柱の痕跡2

左:「ほ②」上部南面西側/中:「ほ②」上部南面東側/右:「ほ②」下部南面

付近にあったものと思われる。

- ・ [ほ②]の床框痕は、現在の床の形状とは合わないため、現在の床の間は[ち⑥]の床柱とともに明治45年の移築時の新造と考えられる。また、違棚についても旧本陣の図には記載がないため、同時に新造されたものと考えられる。
- ・ 庫裏の座敷におけるその他の柱[と②][り②][ぬ④][へ⑥][ち⑥]については、面取りが小さく糸面であること、床及び長押を下げた痕跡が見当たらないことから、明治45年の移築時に新規に設けられた柱と考えられる。
- ・ [ほ⑥]については、上述の通り面取りが大きく[ぬ⑥][ぬ②][ほ②]と一連の仕事と見なせるが、長押と床を下げた痕跡がないことから、元々次の間で使用されていた柱であったと推定できる。

#### ○次の間について

現在の次の間の広さは10畳であるが、旧本陣の間取図【図3】における「御次」は「拾式畳半」であり、移築に際し奥行の規模が縮小されていることがわかる。表面に薄板が張られている柱など目視での痕跡の確認ができない柱も多いが、[に⑥]をはじめ朽損状態から旧材と思しき柱も見られるので、移築時に旧本陣の材も利用しつつ、前面の土間と合わせて再構成されたものと考えられる。

#### ○床柱と欄間の意匠について

現在の座敷の床柱には、上述の通り2次的な加工痕もなく明治45年の移築時の新造と考えられるが、意匠面においても、磨き丸太材を用いて正面下部のみ面を削り出して木目を見せるなど、控え目ながらも数寄屋風意匠を志向している。こうした傾向は、一般に格式と荘重さを重視した近世の本陣建築における上段の意匠傾向とは異なり、銘木の流通がもたらした近代和風建築の特徴と捉えることができる。

一方で、座敷と次の間との境に設けられた欄間の意匠は、一般的な箴欄間よりも組子間隔を大胆に広くとった簡素な格子欄間であり、格調高く禁欲的なものである。このような意匠は、武家屋敷に準じた質実剛健さが好まれた本陣の建築の傾向に合致するため、旧大久保本陣から移設されたものである可能性がある。

#### 5. 西光寺庫裏の文化的価値について

以上の考察の通り、西光寺庫裏は、旧大久保本陣の柱材に新材の柱を加え、また旧柱材の位置も適宜変更して新たに再構成されたものと考えられる。

最後に西光寺庫裏のもつ文化的な価値について、現時点で判明している事実から以下のように総括しておきたい。

- (1) 明治末の建立時から大きな改変を受けることなく現存している点において、近代和風建築としての歴史的・文化的価値が認められること。
- (2) 最も格式の高い室である座敷において、旧大久保本陣の母屋における「御居間」(上段の間)の規模=12畳半を継承するとともに、「御居間」及び「御次」(次の間)の柱と考えられる旧材などが現存していることから、断片的ながらも旧本陣の建築の特徴・痕跡を今日に伝えていること。

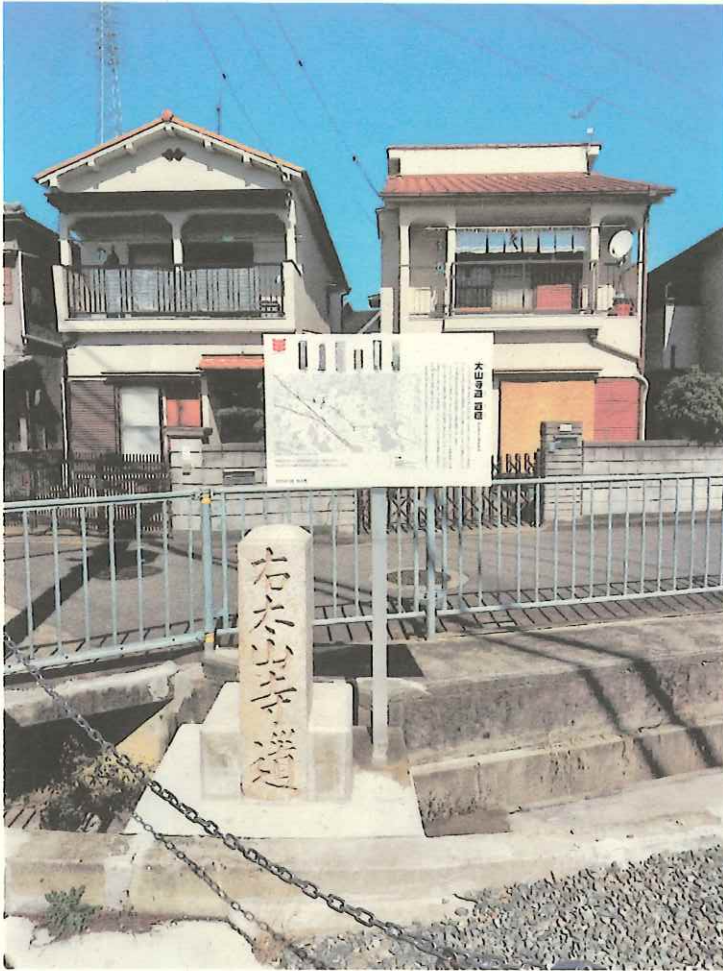
なお、現在の座敷の床・棚などの座敷飾りは移築時の新造と考えられるものの、12畳半の座敷規模にくわえ、旧材の柱を縁側(鞘の間)に面した位置に引き続き用いる点など、旧大久保本陣の建物における建築構成を一部継承している側面が認められる。このため、長押や欄間などの柱間に納められた造作材にも、旧本陣から移設されたものが含まれている可能性がある。この点については、解体修理などの機会に精緻な調査を行わないと判断できないため、将来、明らかにされることを期待したい。

#### 【注】

1. 松江市蔵「駅々御本陣間取絵図」のなかに「大久保本陣 安藤助太夫」の屋敷間取図も収録されているが、同図には上段にあたる「御居間」及び次の間にあたる「御次」とも、十二畳半であったことが記されている。
2. 住職への聴き取りによる。
3. 藤島亥治郎によると中山道における本陣は「広さは八畳から十畳が多く、二の間以下の

方を十畳以上に広くして臣下の休泊に使用する場合が多い」とのことである（『中山道宿場と途上の踏査研究』（平成9年、東京堂出版））。また、大熊喜邦によれば東海道の本陣においても、「最上位とする座敷は八畳の間を普通とし十畳敷を以て大なるものとする」としている。これらに比すと、大久保本陣の12畳半は特に大規模なものであったことが窺える。

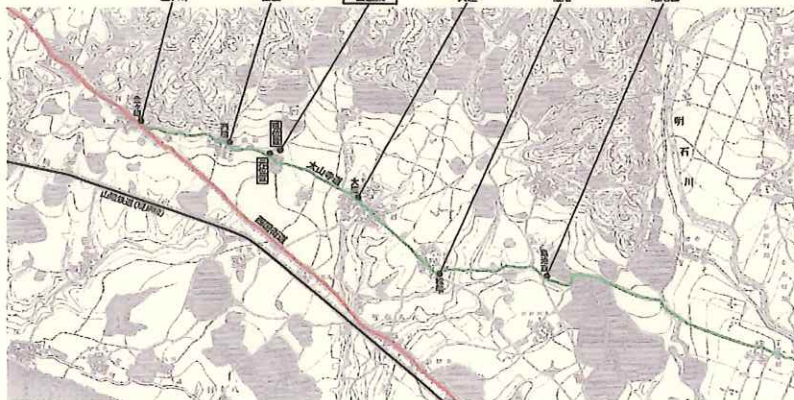
4. 住職への聴き取りによる。
5. 旧本陣の図には明記されていないが、「御居間」と「台子（の間）」との境に描かれているのが一間幅の床の間と考えられる。また、そこから鍵の手に折れた鞘の間側にある同様の描写は、やや奥行きが浅いところから見て付書院かと思われる。



太山寺道道標



文化財部文化遺産課



地形図資料 明治10年測量3000尺正 25分01秒経緯(大久保町)

幹線道であった西国街道から金ヶ崎で分かれ、  
太山寺へ至る最短の道を道標たちが案内しています。

2024年3月 明石市

## 太山寺道道標

明石市大久保町西脇

江戸時代中頃以降、庶民の間で神社仏閣へのお参りが盛んになり、その道案内のため、主な道の交差点に道標道しるべが建てられました。この道標もその一つで、太山寺神戸市西区伊川谷町前開への道を案内しています。

もとは約八十m南西にありました。昭和十四年(一九三九)、工場建設時に北側に新しく造られた東西の道と赤根川の交差点に移されましたが、いつしか川の中に埋もれてしまいました。令和四年(二〇二二)二月、河川改修工事中に見つかり、その後、現在の場所に移されました。

江戸時代から多くの人が行き交った「信仰の道」を伝える大切な文化遺産です。



高丘窯跡道標

兵庫県指定文化財

たか おか こ よう せき ぐん  
高丘古窯跡群

昭和50年3月18日 指定



このあたりに広がる高位段丘の斜面には高丘古窯跡群とよばれる窯跡が20基ほど見つっています。そのうち、13基が発掘調査され、7世紀から8世紀にかけて須恵器と瓦を焼成したことが明らかとなりました。窯跡はいずれも全長10m余りの竈窯です。当初は須恵器を焼いていましたが、7世紀中頃になると瓦を焼くようになり、窯の構造も半地下式から地下式になり、床面が階段状になるものが現れます。この斜面からは5・6・7号窯の3基が見つかり、発掘調査の後、保存されています。

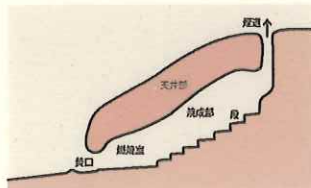
5〜7号窯で作られた軒丸瓦は7世紀に奈良県の奥山麿寺や豊浦寺などに供給されたことが明らかとなっています。また、ここより約100m北にあった3号窯からは大阪の四天王寺講堂跡から発掘された鴟尾とよく似た鴟尾が出土しており、大阪に運んでいたことがわかりました。

高丘古窯跡群は、この地域で最初に瓦を焼き始めた窯跡で、古墳時代から奈良時代にかけての窯業生産のあり方を考える上で重要な遺跡です。

2024年3月 明石市



右から5・6・7号窯 (兵庫県立考古博物館写真提供)



高丘古窯復元図



軒丸瓦 (復元)

## 三番割古墳群 実績報告

- 1 所在地 明石市大久保町松陰新田
- 2 開発事業名 道路新設工事
- 3 事業者名 明石市
- 4 調査主体 明石市
- 5 調査担当者 稲原昭嘉・下城友祐
- 6 調査の種別 発掘調査
- 7 調査期間 2023年12月7日～2月28日
- 8 調査面積 約1029㎡
- 9 調査の概要

調査地は、明石市大久保町松陰新田に所在し、宗賢神社の南西約400m、南東から北西に延びる丘陵の南西に広がる裾部の平坦地、標高約27.3mの段丘上に立地している。2023(令和5)年12月7日から、江井島松陰新田線道路新設工事に伴う発掘調査を行ったところ、調査区の東部を南北に流れる谷筋の西側段丘突端部分において、5世紀後半に相当する2基の古墳の周溝が発見された。

2基とも上部は後世に削平され、墳丘や埋葬部などは失われており、周溝下層部のみとなっていた。その形状からいずれも円墳であることが分かり、復元した墳丘の直径は約14m、溝の外周まで含めた直径は約17m だったと推定された。

### ●1号墳(北側)

周溝は、幅約2m、深さ約7cmが残存しており、埋土からは土師器や円筒埴輪の破片などが出土した。埴輪片は残りが少なく、正確な形を復元することはできなかったが、口縁部や底部から、円筒埴輪が大部分だったと考えられた。

### ●2号墳(南側)

周溝は、幅約3m、深さ約15cmが残存しており、埋土からは須恵器甕と円筒・朝顔形埴輪の破片が出土した。甕は胴部径約11cm、高さ約10cmを測り、頸部に櫛描波状文がみられる。

円筒埴輪片は口縁部、胴部、基底部端の部位がそれぞれ確認されている。ほとんどが土師質であるが、須恵質のものも数点確認された。埴輪口縁部から下の突帯までの長さは約9cm、底部から第1段突帯までの長さは約14cmを測る。外面にはタテ・ヨコ両方向のハケメ調整が観察された。朝顔形埴輪片は頸部の下部分が確認されている。

いずれの古墳も、周溝内側の肩付近に埴輪片が集中しており、当時の墳丘には円筒・朝顔形の2種類の埴輪が並べられ、それらが溝内に倒れ込んだものが残されていたと考えられる。今回の古墳の発見で、この時期の当地に有力な豪族が存在していたことが明らかとなった。

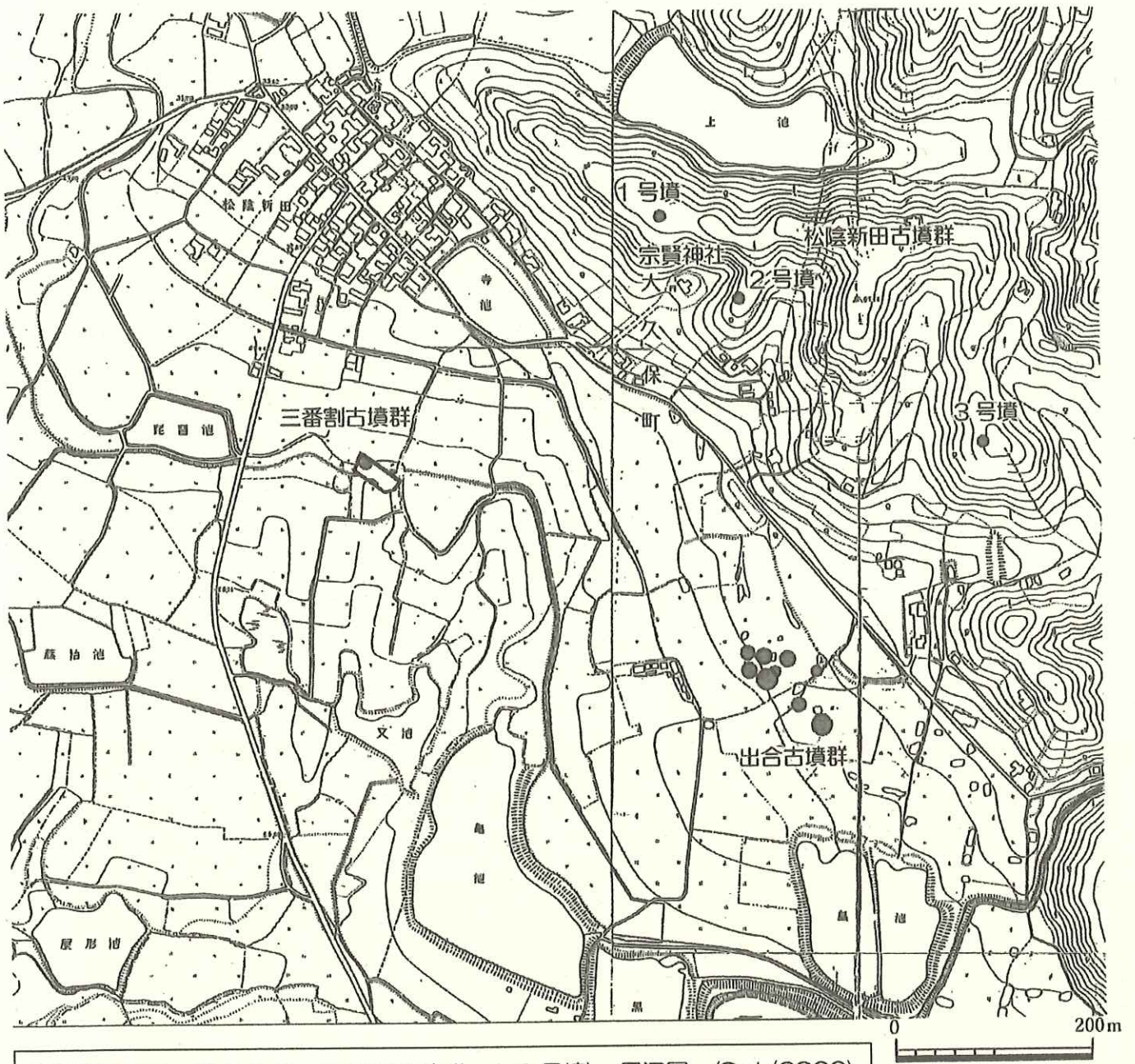
### 10 まとめ

当地より南東の段丘上には、出合古墳群(5世紀後半～6世紀前半)が位置している。ま

た、北東の丘陵の尾根上にも、調査はされていないが古墳があるとされている(松陰新田古墳群1～3号墳)。今回発見された2基の古墳との距離はいずれも約400mであり、当古墳がいずれかの古墳群に属するものであるとは考えにくく、当地において独立した古墳群であるとみられる。その一方で、墳丘の形状や規模は出合古墳群のものと類似しているため、これらの古墳群との関連性について、出土遺物の比較等を通して探っていくことが今後の課題である。

明石市内での古墳としては、4世紀後半の幣塚古墳や、6世紀前半のカゲユ池古墳、寺山古墳など、これまで10例ほどしかその所在は知られておらず、その中で、今回検出された2基の円墳は、これまではその存在が知られていなかった時期の古墳であり、周辺の古墳群と併せて、この地域における当時の豪族層の動向を明らかにする上で、重要な発見となった。

また、同調査区の西側では、2023年3月から5月にかけて、同じく道路新設工事に伴って調査を行っており、13～14世紀に相当する溝や土坑が検出され、須恵器甕、捏鉢、土師器羽釜などが出土している。中世においても、人の活動があったことが確認されている。



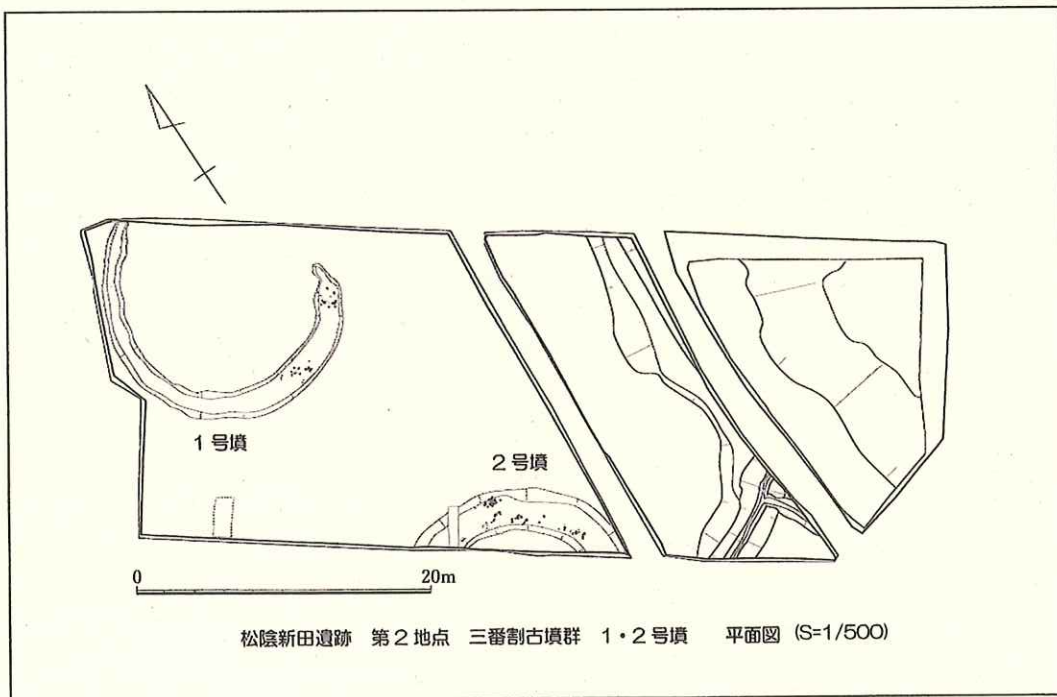
松陰新田遺跡 第2地点 (三番割古墳群 1・2号墳) 周辺図 (S=1/6000)



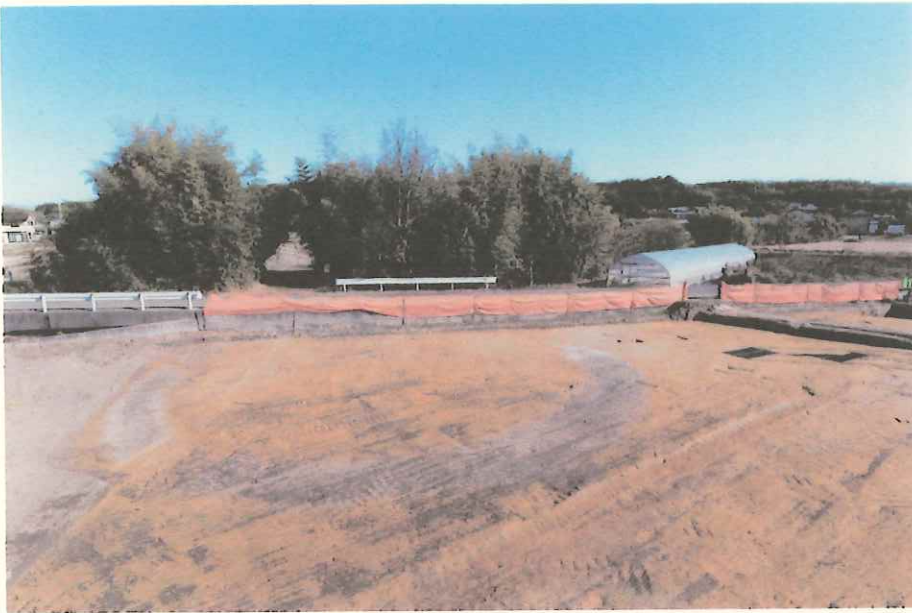


三番割古墳群 周辺遠景 西から

三番割古墳群 1号墳



松陰新田遺跡 第2地点 三番割古墳群 1・2号墳 平面図 (S=1/500)



1号墳検出状況



2号墳検出状況



2号墳埴輪出土状況



2号墳埴輪検出状況



2号墳作業状況



埴輪検出状況



2月10日現地説明会風景



現地説明会風景



魚住収蔵庫での展示風景